

映画「長岡花火物語」の大林監督

復興の力今伝えたい

今夏から撮影が始まる映画「この空の花—長岡花火物語」の大林宣彦監督(73)が8日、シナリオの完成を森民夫市長に報告した。物語の背景に東日本大震災のエピソードを加えたことを説明。市内の避難者支援のため、自ら手掛けた映画のDVDや本など約60点と支援金を贈った。

市長にシナリオ完成報告



震災の発生で、大林監督の元には市民から映画製作の進行を心配する声が寄せられたという。この日は、順調に進んでいることを森市長に報告。前日までの1週間、同市の蓬平温泉に滞在してシナリオを完成させたことも明かした。

大林監督は「皆さんと一緒に作り上げたい」と話し、森市長は「ぜひ実現させてほしい」と激励した。シナリオの書き換えで、出演者は5月ごろまでに決める予定だ。

森市長への報告後、大林監督は「被災した皆さんに敗戦と中越地震から立ち上がった長岡の勇気と未来を信じる力を伝えたい」と関係者に説明。1945年8月の長岡空襲からの復興の祈りが込められた花火を軸にした当初の物語に加えて、長岡市民が東日本大震災の避難者を迎える姿なども新たに織

り込んだという。大林監督は「山古志地域の人々の『恩返ししたい』という言葉が忘れられない。人の輪が広がっている。私は映画で夢と希望を皆さんに届けたい」と語った。

森民夫市長に長岡花火映画の進行状況を伝える大林宣彦監督
8日、長岡市役所